

教育者部門
受賞者
大澤 眞木子



■講演を行う大澤氏

広げていった。そして1990年、テュートリアル方式を導入したMD(Medical Doctor)プログラムを1年生から開始することになる。この教育プログラムは日本の医学教育モデルコアカリキュラムの礎となり、東京女子医科大学は2012年に日本で初めて、世界基準に基づいた医学部分野別評価を受審し高評価を得るに至った。

大澤氏は1994年に小児科主任教授に就任、テュートリアル委員長や人間関係教育委員長など教育関連の主要な委員会の長を歴任した。2008年には東京女子医科大学で女性初の医学部長に就任。自身の経験から、女性医師復職支援プロジェクトにも精力的に関わった。

故吉岡守正学長の「感性を磨き、良いと思ったことは即実行せよ」「患者さんが聞いて心地良い言葉遣いで対応せよ」との言葉から患者さんの視線を学んだ大澤氏。医療においては「患者ファースト」として強い信念のもと医療に向き合い、「患者さんに育てて頂いた」という謙虚な姿勢を貫いた。同様に教育においても「学生ファースト」を信念として、自らがロールモデルとなり、時に厳しく時に優しく学生の心に寄り添った。信念と情熱を持った医師であり教育者である大澤氏は、これまでの献身的な活動から著名な女性リーダーとして社会的に大きな存在感を示してきた。25年の長きにわたり日本の医学教育におけるテュートリアル教育導入に先駆的役割を果たし、日本の高等教育の改革に多大な貢献をしてきた大澤氏の今後の活動に大きな期待がかかる。



おおさわ まきこ
大澤 眞木子
Makiko Osawa

東京女子医科大学 名誉教授
Professor Emeritus,
Tokyo Women's Medical University

1972年東京女子医科大学卒業後、同大学病院小児科医局に入局。医学博士。講師への昇格を経て、故吉岡守正学長の命を受け1987年カナダ・マックマスター大学に留学、客員教授として先進医学教育システムを学び、テュートリアル教育の立ち上げに尽力。のちの日本の医学教育モデルコアカリキュラムの礎となった。日本における筋ジストロフィー、てんかん医療の第一人者であり、女性初の日本小児神経学会と日本てんかん学会で理事長となる。患者支援・指導にも力を注ぐ。2008年には東京女子医科大学で女性初の医学部長に就任、女性医師復職支援プロジェクトを精力的に推進。2013年同医大の名誉教授に就任。女性医師への支援など精力的に活動が続けている。

推薦者

新田 孝作
東京女子医科大学 医学部長

神田 尚俊
東京農工大学 名誉教授

宮崎 俊一
東京女子医科大学 名誉教授

「至誠と愛」の教えに導びかれ 医学教育カリキュラムの礎を築く

さまざまな出会いから学び、教育理念を構築



■白河セミナーハウスでのチューター養成プログラム参加者集合写真

小児科医で日本の小児神経医療、てんかん医療の第一人者であり、日本における医学教育カリキュラムの礎となった「テュートリアル教育」の導入に尽力した大澤眞木子氏。

大澤氏は1972年に東京女子医科大学を卒業後、同大学院にて、福山型先天性筋ジストロフィーで知られる故福山幸夫名誉教授に師事し、1983年に講師となる。当時、日本の医学教育改革の先陣を切っていた故吉岡守正東京女子医科大学学長は「医師を育てるためにテュートリアル教育や人間関係教育が重要」という信念で、テュートリアル教育導入にリーダーとして学長生命をかけて臨んでいた。その折、大澤氏は吉岡学長の命を受け、1987年に半年間、カナダのマックマスター大学に留学することとなった。数名の学生とチューターと呼ばれる教員がブレインストーミングをしながら、学生が自主的に考え、学び、問題を解決に導くテュートリアルという教育法をここで身に付けた。今ではPBL(Problem Based Learning)、問題解決型学習として広く認知され、医学だけでなく広く他分野でも導入されている教育法である。

帰国後、診療や研究に忙殺されていた医師たちからの理解を得られず、すぐの導入には至らなかった。吉岡学長が導入を目指して組織したテュートリアル委員会では、メンバーが紙芝居を製作して医局を回り、理解を得るために奔走、大澤氏も各医局からの厳しい質問に納得の得られるような具体的な説明で答えていくことで、支持の輪を